

多面的・多角的に
歴史をとらえよう！

歴史のイメージに工夫をこらし、 叙述の読みやすさを追求



東京大学名誉教授・立正大学教授・群馬県立歴史博物館長 黒田日出男

考える歴史と手がかりとなる教科書

歴史は〈記憶もの〉だと考えている人がまだまだたくさんいる。それは半ば正しく、半ば間違っているといえよう。数学や理科でも、定理や公式など多くのことを記憶しなければならぬし、どんな問題でも考えるためには、まず事実を詳しく知ることが不可欠である。歴史も同様で、史実を豊かに記憶することが基礎となる。知らないことについては何も考えられないのだから、必要なことは覚えなければならない。

そのような史実を覚えながら、しかし、歴史の勉強で大切なのは、多面的・多角的に考えることなのである。歴史上の事件や歴史の展開に疑問をいだき、それらをさまざまな角度から見て考える。それによって歴史の深い理解へと到達することが可能になる。そうした〈考える歴史〉のための教科書作りを、わたしたちはめざした。歴史知識の詰め込みではなくて、生きた歴史的思考の獲得のためにも必要なことである。

一つの絵から豊かな歴史を見つける

そのためには、教科書は無味乾燥であってはならない。わたしたちの教科書には、だから多くの工夫がなされている。そのうちの一つをここでは強調したい。

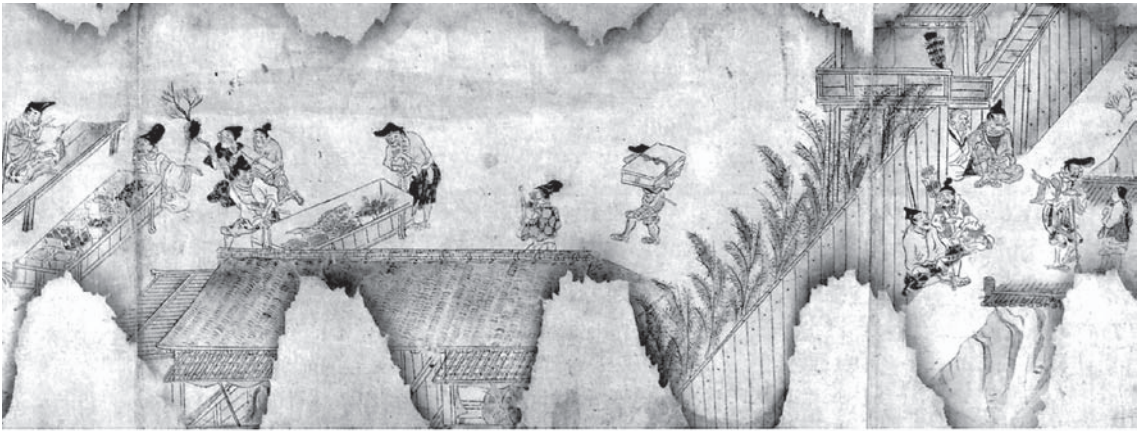
それは、歴史のイメージをできるかぎり生

かそうとする試みである。この教科書では、図版はたんなる挿絵ではない。それらは、歴史を考えるための材料として十分に活用できるような工夫が凝らされている。

ここでは中世を例に取ろう。中世は絵巻物の時代であるといえるほどに、たくさんの絵巻物がつくられた。『信貴山縁起絵巻』や『伴大納言絵巻』・『源氏物語絵巻』など、現存するだけでも数百点になる。それらを活用すれば、中世社会のさまざまな面をクローズアップすることができる。

たとえば、武士（領主）の屋敷（館）については、『粉河寺縁起絵巻』・『一遍聖絵』・『男衾三郎絵詞』などが、教科書の挿絵として使われている。『粉河寺縁起絵巻』の場合には、領主の屋敷に、人々が年貢を納めに来ている様子が描かれている。『一遍聖絵』の九州のある武士の屋敷の描写では、どのような建物が立ち並んでいるかがよくわかる。門のところには櫓があり、楯や弓矢が見える。そして『男衾三郎絵詞』では、屋敷内で武士が弓の弦を張っていたり、笠懸で弓射の訓練をしている様子が生き生きと表現されている。いずれも興味深い場面であり、従来の教科書は、それらの絵巻のうちどれか一つを選んで、図版として使ってきた。

しかし、絵巻に描かれた武士の屋敷はどれも一面的であり、中途半端にしか描かれていない。また、その周囲に広がっていたであろう田畠や農民の家々、そして道や用水などとの繋がりがたも不明である。中世の村のなか



▲① 武士の館 〈粉河寺蔵絵巻〉、和歌山県 粉河寺蔵 門や深い堀をめくらし河内国(大阪府東部)の有力者の屋敷。
 ① P.27の貴族の邸宅と比較してみましょう。

帝国書院「中学生の歴史 最新版」p.50

▶④ 弓を射る訓練をする武士
 〈男衆三郎絵巻〉 東京国立
 博物館蔵 武士にとって、
 もっともたいせつな武芸は、
 馬上で弓を射ることでした。



◀⑤ 弓の弦を張る武士たち 〈男衆
 三郎絵巻〉 東京国立博物館蔵 強
 く張った弓が、武士たちにとって自
 慢でした。絵は、2人がかりで弓を
 まげ、弦を張っているところです。
 右上では弓を射る時に使う手ぶくろ
 の手入れをしています。

帝国書院「中学生の歴史 最新版」p.63

で、領主の屋敷はどのような存在としてあったのかがよくわからないままである。

ならば、である。

中世の武士の屋敷や村の姿を、それらの絵巻物などを合成して描き出したら、とても魅力的な絵（場面）になるのではあるまいか。生徒たちの想像力を刺激できるように、多数の絵巻の場面を重ね合わせ組み合わせ、可

能な限りリアルな中世の領主屋敷と村の姿を描いてみよう。

これまでの絵巻の場面をそのまま図版にするのでは、史料集の史料と同じ使い方にとどまる。それに対して絵にした場合は、ビジュアルな歴史叙述の試みとなる。それは新鮮に違いない。教科書本文の叙述と絵画による叙述がうまく関連しあえば、生徒たちにとって

▶③和泉国日根野荘繪圖〈東京都 宮内庁書陵部蔵〉

荘園を支配した貴族や武士は、荘園からより多くの収入を得るため、新たな開墾をすすめました。右の絵図は、鎌倉時代の和泉国日根野荘（大阪府）をかいたものです。



まず、図中にかいてある方位を見つけてみましょう。北がわの山のふもとにある六つのため池をさがしてみましょう。道が縦横にはしていますが、西の方はあれ地が広がっています。

▼④鎌倉時代の水田と休耕田 〈「一運絵巻」 神奈川県 清浄光寺蔵〉



帝国書院「中学生の歴史 最新版」p.61

歴史は興味津々たるものとなるだろう。

つねにいろいろな〈発見〉がある！

かくして描かれた領主屋敷と村をじっくりと見て、生徒たちはじつにさまざまなことを発見するはずである。

村内でひととき大きな領主屋敷の門前には、武士たちがおり、威圧的である。門の上は櫓（矢倉）になっていて、そこにも武装した武士がいて、楯とたくさんの矢が用意されている。敵襲への備えなのである。

武士の姿に関心をもった生徒は、二人がかりでしている弓の弦の張り方や武器の状態、そして中世武士にとっては弓矢と並んで重要だった馬の飼い方に着目することだろう。馬屋のそばには魔除けのために猿が繋がれてい

ることもわかるに相違ない。そして、武士たちが矢を作っていることにも。

人々が納めにきた年貢に気づいた者は、年貢が米俵だけでないこと、山の幸や布などにも年貢であることに気づくだろう。頭上運搬などさまざまな運搬方法のあることにも。そして領主の側では、年貢のリスト（目録）を見ながら、現物を確認することも行っているのである。

動物が好きな生徒たちは、田園に飛来している鶴や鷺に気づくだろうし、領主の屋敷内では、猫が紐で繋がれているのを発見して、恐らくびっくりすることだろう。そうなのだ。猫が放されるようになるのは近世の初めであり、それは都市における鼠害を防ぐための政策として実施されたのであった。また、鷹や犬がどのような役割をはたしていたかも考え

られるだろう。

次に、村と村人の生活に目を向けると、秋ならば稲刈りの最中である。子どもたちも含めて家族総出だ。農家では、脱穀が行われているし、稲刈り跡の田園では、老人や女性・子どもが落ち穂拾いをしている。落ち穂拾いは、村内の貧しい人々の権利であった。また、村人の家では脱穀などが行われているが、それをしているのは、男か女か、老人か子どもか。中世における老人と子どもの役割や男女の性別分業も考えることができる。河川では、釜（うけ）で鰻などを取っている男の姿があるだろう。

村人の家には、大きな家も小さな家もあり、屋根も藁葺きや板葺きがある。農家の一部には竪穴式の小屋があるだろう。また、村には、鍛冶屋もいたと思われる。

また、村内の道路にも、さまざまな人々が行き来している。それらの人々は一体何者なのか。たとえば、琵琶法師が弟子をつれて歩いている。人々に念仏をすすめる聖や仏法修業者も村や領主の屋敷を訪れている。その法話を聴聞したり、念仏踊りを見るために、近在からも人々が集まってくる。あるいは、秋の祭りのために、田楽踊りの一座もやってくるだろう。物乞いをする者の姿も見られることだろう。

こうして自由な視点から読み、気づき、そして議論することなどによって、中世社会の様相を理解することになるだろう。生徒たちは、各自の個性的な着眼点から出発して、中世の村と領主屋敷の全体を考えていくことになるのである。

さまざまな歴史の風景が見えてくる

当然、中世の都市はどのような様相であったのかについても、絵がほしくなる。絵巻や

洛中洛外図屏風などの屏風絵、さらには絵図などを重ね合わせていけば、十分に可能であり、それからは、中世都市の様相が生き生きと読み取れることになるだろう。ここではこれ以上述べられないが、想像してほしい。

同様に、古代の風景も、近世城下町の姿も、そして近世都市江戸の光景も描くことは可能である。

となれば、肝腎なのは工夫してみることだ。従来の歴史教科書には、どの教科書でも豊富な挿絵が使われている。しかし、歴史を多面的・多角的に考えるのに役立つようなビジュアルな叙述の工夫はなされてきたとはいえない。その壁を乗り越えてみたい。

国際化時代の教科書のコンセプト

もとより、歴史のイメージの工夫だけではない。それ以上に努力を傾注しなければならないのは、本文の叙述である。

わたしの意見では、教科書は声を出して読むと、そのよしあしがわかる。読みやすく、歴史の流れがとらえやすい叙述、これはいつの時代でもめざすべき教科書の王道であろう。そのような叙述にできるか自信はないが、そのようにめざすべきなのである。

また、歴史教科書が陥りがちな史実や人名などを押し込んだだけの無味乾燥な文章ではなく、あるいはまた、押しつけの歴史が叙述されているのでもなく、歴史の展開が生き生きと感じられるような叙述をこそ実現すべきなのではないのか。

そして、国際化時代にふさわしいのは、日本の歴史を多様な見方から見つめることのできる教科書であろう。そうした魅力をもった教科書へと育てていくことが念願である。